

ひと・まち・つながる教育

岬町立深日小学校

Why

なぜ取組みを進める必要があったのか（実態・背景）

- 都市近郊の自然豊かな町であるにもかかわらず、人口減少、少子高齢化の傾向が顕著であった。
- 地区人口の減少以上に児童数の減少が著しく、学校運営や子どもの学びにも影響があった。
- 学校を地域、大学、行政、企業など様々な人が集い交流するターミナルとして位置付け、学校の活性化を地域の活性化につなげることが地域に根差した学校づくりであると考えた。

How

どのように取組みを進めたか（取組みの概要）

- 健康・体づくり教育の充実を図るため生活習慣調査と体育の授業改善や運動の工夫など、学校全体で楽しみながらできる取組みを実施した。
- 健康・体づくり教育を推進するにあたって、地域の特徴を活かした食育を推進した。
- 地域の方々と教職員が楽しみながらつながった。

Change

どのように変容したか（学校・保護者・地域等）

- 地域の人たちとの交流を通して、相手が喜ぶことが自分の喜びに変わり、自分たちの自己肯定感や新たな気付きへとつながった。
- 保健室来室数が減少した（けが・心理的要因のどちらも減少した）。
- 学校の教育活動により一層、関心が高まり、学校行事や児童が参加する地域の交流の場への参加者が増えた。



1. 「ひと・まち・つながる」教育を通じた学びの実践

- (1) 「ひと・まち・つながる」教育について
- (2) 「ひと・まち・つながる」体づくり
- (3) 「ひと・まち・つながる」健康教育
- (4) 「ひと・まち・つながる」食育
- (5) 「ひと・まち・つながる」教育のひろがり

2. 取組みの成果について

- (1) 子どもたちの変容について
- (2) まとめ

1. 「ひと・まち・つながる」教育を通じた学びの実践

(1) 「ひと・まち・つながる」教育について

岬町は、大阪府南部に位置し、都市近郊の自然豊かな町であるが、人口減少、少子高齢化の傾向が顕著であった。地区人口の減少以上に児童数の減少が著しく、学校運営や子どもの学びにも影響があった。

そこで、学校を地域、大学、行政、企業など様々な人が集い交流するターミナルとして位置付け、学校の活性化を地域の活性化につなげることが地域に根差した学校づくりであると考えた。

これまでも、地域との連携は進めてきていたが、様々な取り組みを教科等横断的な視点でどう組み立てていくのかを意識したカリキュラム・マネジメントを推進するにあたっては、地域の人的・物的資源をどのように捉え、地域の方の願いや思いを把握し、つながっていくことがカギになると考えた。

子どもたちが地域の方々と出会い、自然・文化・環境等にふれ合いながら、主体的に学びを深められるよう、右上囲みに示した「ひと・まち・つながる」教育の目的を設定した。

<「ひと・まち・つながる」教育の目的>

○ 年間を通して全学年が教科を横断しながら自然豊かな岬町の特徴を活かしつつ、地域の「少子高齢化」に対し、子どもが主体的に試行錯誤しながら、地域の活性化に関わっていきけるようにする。

○ 子どもが学校・地域・大学・行政・企業等と多様なかわりを持ち、学びを広げ、深めることで郷土や地域に誇りや感謝の気持ちをもてるようにする。



「体づくり」・「健康教育」・「食育」を中心に据えて、子どもたちにつけたい資質・能力を意識しながら、目的の達成をめざした。



(2) 「ひと・まち・つながる」体づくり

平成27年度の全国体力・運動能力・生活習慣等調査において、深日小学校の児童の体力面での課題が顕在化することとなった。その課題解決に向けて、大阪府の子ども体力づくりサポート事業の対象校となり、岬町教育委員会と和歌山大学教育学部保健体育専攻の教授から指導・助言を得られることとなった（下記事例参照）。これをきっかけとして、子どもたちの体づくりだけでなく、教員の指導力の向上に向けた取組みが行われることとなった。その結果、平成30年度と同調査結果において、深日小学校の取組みがスポーツ庁のホームページでモデルケースとして紹介されることとなった。



例えば、委員会活動等で、教員、和歌山大学教育学部保健体育専攻のボランティア学生と児童が一緒になって、「体づくりキャンペーン」と銘打って、昼休みに「全校あそび」やあそびの要素を取り入れた体づくりのトレーニングの「場」の設定を考え、その内容を給食の時間に児童と一緒に校内放送をするなどして、楽しさを全面的に打ち出した。

その中で、児童・学生・教員が関わる時間を増やし、お互いに協力しながら共通の目標に向かって、楽しみながら学校を活性化させていく取組みとした。

児童や学生たちの主体的な活動に刺激を受け、併設されている保育所と合同で全校でラジオ体操を実施するなど、学校としての新たな取組みも始まった。そのなかで、最も象徴的であったのは、運動会を体育専攻の学生ボランティアと一緒に準備・練習段階から企画し児童や地域と一緒に創り上げていったことである。

プログラムの中には学生が主催し、体育専攻の学生と50メートル走を競う種目「和大学生と走ろう」や地域の人や参加者を借りてくる「借り人競争」、児童の種目への学生チームの参加など、毎年種目を変えながら企画してきた。現在では、多くの人に参加し運動会を通して、児童のがんばりと身体を動かすことの楽しさや人とのつながりが感じられる場となっている。

このように、「体づくり」を軸にした大学や地域との連携を進めていくことで、体力測定の数値に改善がみられたのではないかと推察できる。

こうした取組みを進めるにあたって大切なことは、

- ① 体づくりが継続的な活動となるために、児童が楽しみながら主体的に取り組めるようにすること
- ② 児童と一緒に楽しんで取り組むメンバーを増やすこと

の2点が挙げられる。

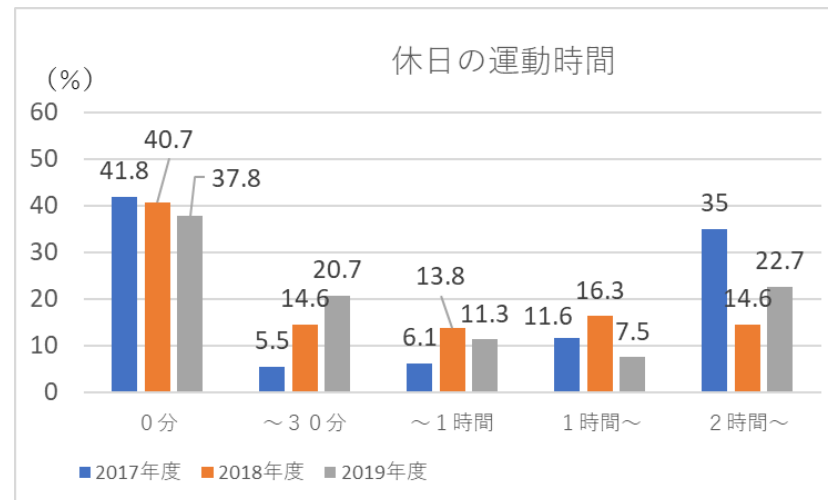
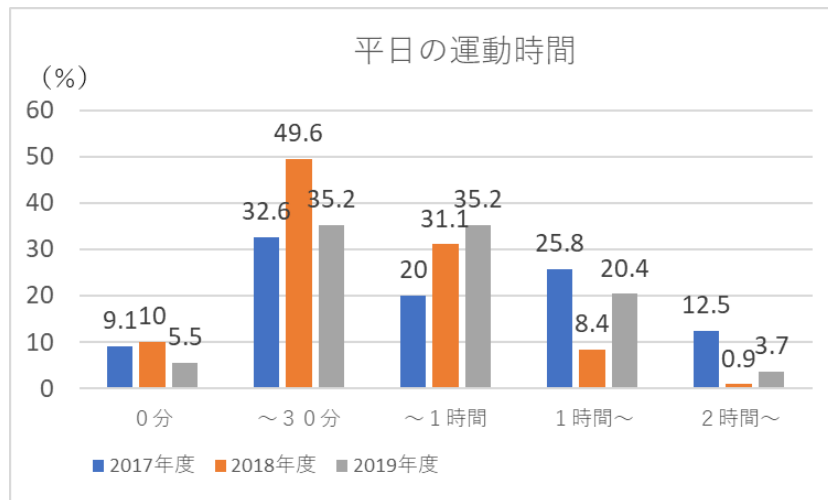


「ひと・まち・つながる」体づくりの取組みを進めると同時に、児童の運動時間に関する実態を把握するために調査を行った。下図は、平日と休日の運動時間の変化を示している。運動時間は体育の授業は含まないが、放課後や休み時間に外遊びをすること、運動系の習い事は運動時間に含めている。特徴的なことは、休日の運動時間において「0分」が圧倒的に多いことである。

これらのデータを基に、職員間で客観的に児童の運動時間が把握できたことで、体育委員会などの委員会活動を通じて、児童にこうした課題をどのように解決していくことができるのかを問いかける材料となり、体育の授業改善や休み時間の使い方の改善のための指標となった。



外遊びの工夫



(3) 「ひと・まち・つながる」健康教育



これまで、健康教育の充実を養護教諭を中心に行ってきた。

年間2回実施している生活習慣調査は、子どもたちが自分自身の生活習慣の課題を見つけやすいように、時間軸利用の研究手法をもとに、テレビやスマホ等、自分たちが使った時間を数直線上に記入していくように工夫し、生活習慣を「見える化」した（右図参照）。

単純に決めた時間を守るということよりも、自分自身がどのように1日の時間を使っているのかをふり返って自身を客観視することを主目的とした。これは本人だけでなく、保護者や教員にとっても「朝起きてからすぐにスマホを触っているからやめておこう」といった具体的なアドバイスにつながり、児童にとってもわかりやすくなり生活習慣の改善につながった。

🐾 自分の生活を記録しよう! 🐾

3年 5組

1. 自分の生活の目標を決めよう。(例) 10時までに寝るぞ! 毎日少しでも運動する。

目標 少しでも運動をしたい!!

2. 今日の朝起きた時間と、昨日の夜寝た時間に○をしましょう。
3. スマホ・テレビ・ゲームの時間に線を引きましょう。(例)

6月18日(月)~6月24日(日)

日	朝		昼		夜		スマホ・テレビ・ゲームの時間合計	4. ごはんを食べた		5. 体を動かす運動、遊びをした					1日の運動時間の合計を書きましょう
	起	寝	起	寝	起	寝		朝ごはん	夜ごはん	大休	寝付	放課	習い	事	
記入例	5	8	12	12	1	10	30分	△	○	○	○	×	×	計	30分
月	5	8	12	12	1	10	30分	○	△	○	○	×	×	計	30分
火	5	8	12	12	1	10	40分	○	○	○	○	×	×	計	30分
水	5	8	12	12	1	10	10分	○	○	×	×	×	×	計	0
木	5	8	12	12	1	10	15分	○	○	×	×	×	×	計	0
金	5	8	12	12	1	10	50分	○	○	○	○	×	○	計	10分
土	5	8	12	12	1	10	20分	○	×	×	×	×	×	計	0
日	5	8	12	12	1	10	15分	○	○	×	×	×	×	計	20分

目標達成は・・・? できた だいたいできた あまりできなかった できなかった

6. 自分の生活を振り返って、より元気に生活するために次はどうしたらいいか書きましょう!

もう少し運動する時間をいやす。楽しい運動ゲームは10分運動すればいい。

すばらしい! 楽しく運動できた方がいいので

生活習慣調査用紙

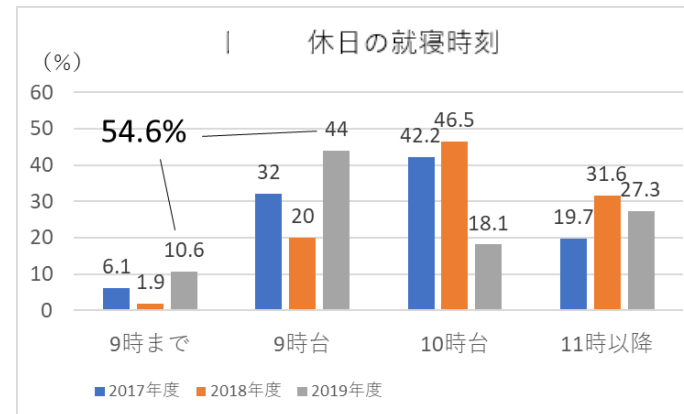
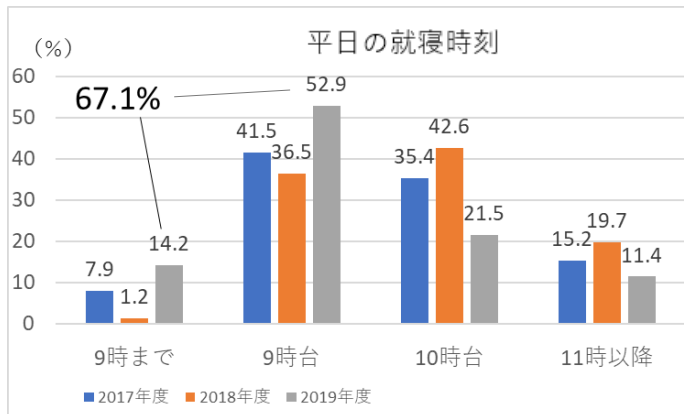
和歌山大学附属小学校と連携し、健康教育を積極的に取り組んでいる養護教諭による出前授業を実施した。内容としては、歯磨き指導や自分の体を守ること、また、生活習慣の改善について、児童が学び合いながら主体的に考える授業を実施した。

下図は生活習慣調査における平日と休日の就寝時刻の変化を示している。令和元年度には平日午後9時台までに67.1%の児童が就寝することができるようになった。生活習慣の乱れやすくなりがちな休日の就寝時刻も午後9時台までの就寝時刻が54.6%に増加していることがわかる。

委員会活動を積極的に活用し、全校集会で劇をしたり、隣接する保育所へも出前授業をするなど児童の活動の場を広げ、健康教育に日常からかかわる意識を持てるように工夫した。他者との交流を楽しみつつ、客観的な分析を用いることで、児童自身が生活習慣を改善し、維持するきっかけとして機能していると推察できる。



和歌山大学附属小の養護教諭による出前授業



保育所・小学校連携

(4) 「ひと・まち・つながる」食育

これまでも食育を実践してきたが、学習内容の整理をし、地域の人的・物的資源を生かした系統立てた学習に改編することにした。そのポイントは、

- ①地域の自然環境や文化を活かし、児童が生産から消費までをできるだけ実感できる食育学習にすること
- ②地域の人材を積極的に活用し、生産者の顔が見えることで食育が地域の人とのつながりによって支えられていることを実感すること
- ③学校側だけでなく、参加した誰もがWIN－WINの関係を作れるようにすること

の3つである。

これまで、地域の協力で栗拾いやひらめの稚魚放流等の体験学習は行っていたが、それらを1・2年生は生活科、3～6年生は総合的な学習の時間を中心に、6年間の中で系統立てて学習する食育や地域学習として位置づけた。次頁の図6は、行事と対応する教科をまとめたカリキュラム・マネジメントの計画表である。



栗拾い



ひらめの稚魚 体験学習

図6. ひと・まち・つながる教育におけるカリキュラム・マネジメント年間計画

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	地域
4月	給食指導(生活)		岬のええとこ 発見だ	見つめよう 私たちの暮らし	自分たちの食に ついて見つめ、 できることを考 えよう	ひと・まち・ つなげよう	
5月	梅採り(生活・国語)	潮干狩り(生活・国語)	梅採り(総合・理科・国語)				地域の方(梅園管理者)
6月	生活習慣調査(生活)	体力測定・生活習慣調査(保健・体育)					体力測定 (ボランティア・和大使)
6月	田植え(生活)		田植え(総合・理科)		田植え(社会・総合)	田植え(総合・理科)	地域の方(水田管理者)
6月	梅干しづくり(生活・国語)		梅干し・梅ジュースづくり(総合・理科・国語)				地域の方(梅園管理者)
7月			稚魚放流(理科・総合)				
8月	折り鶴作成・平和登校日						
9月	稲刈り(生活)		稲刈り(総合・理科)		稲刈り(社会・総合)	稲刈り(総合・理科)	地域の方(水田管理者)
9月	栗拾い(生活・図工・ 国語)		ふれあい喫茶(音楽・総合)		ふれあい喫茶(音楽・総合)		
10月	運動会(体育)						
10月	手まり寿司づくり(生活・国語)		手まり寿司づくり(総合・国語)		手まり寿司づくり(総合・家庭科)		手まり寿司づくり 学校ボランティア
11月	ふれあい喫茶(音楽・生活・道徳)		ふれあい喫茶(音楽・総合)		深日漁協見学(社会・総合)		
12月	深日交流発表会(ひと・まち・つながる教育)						
12月	音楽発表		みさきめぐり (社会・総合・外国語)	見つめよう私たちの暮らし (社会・総合・理科)	食の安全 (社会・総合)	逆言葉 (総合・国語・社会)	町長・町議会議員 岬町教育委員会 保護者 地域の方
1月	保幼小交流(生活)		昔の暮らし(社会・総合)				
2月	生活習慣調査(生活)		生活習慣調査(保健)				ふれあい喫茶(国語・総合)
3月							

深日小の年間行事と各学年の学習内容をもとに岡田作成

計画表では、

- ① 体づくり
- ② 健康教育、生活習慣調査、運動会
- ③ 食育・地域学習領域の食育領域
(栗拾い、潮干狩り、ひらめの稚魚放流、
ひょうたんづくり、米作り、稲刈り、
手まり寿司づくり、梅採り、梅干しづくり、
梅シロップづくりなど)の3つに大別した。

これらの学習を教科等横断的な視点からカリキュラム編成した。栗拾いやひらめの稚魚放流などの単年度で完結する取り組みもあれば、田植え、稲刈り、梅採りなどのように経験の蓄積を学習の軸に据えて6年間、体験し続けるものもある。



<「ひと・まち・つながる」食育の主な取組みのつながり>

学年単位で実施
する取組み

1年生
栗拾い



3年生
ひらめの稚魚放流 体験学習



6年間学び続ける取組み



梅採り・梅干し
梅シロップづくり
体験



縦割りで異学年交流を
しながら活動できること
もメリットになる



米作り
稲刈り体験

①地域の自然環境や文化を活かし、児童が
生産から消費までをできるだけ実感できる
食育学習にすること

②地域の人材を積極的に活用し、生産者の顔
が見えることで食育が地域の人とのつながり
によって支えられていることを実感すること

③学校側だけでなく、参加した誰もが
WIN-WINの関係を作れるようにすること

過去の体験から学びをつなぐ



5年生 深日漁協見学

収穫したものを全児童が
地域の方と一緒に味わう



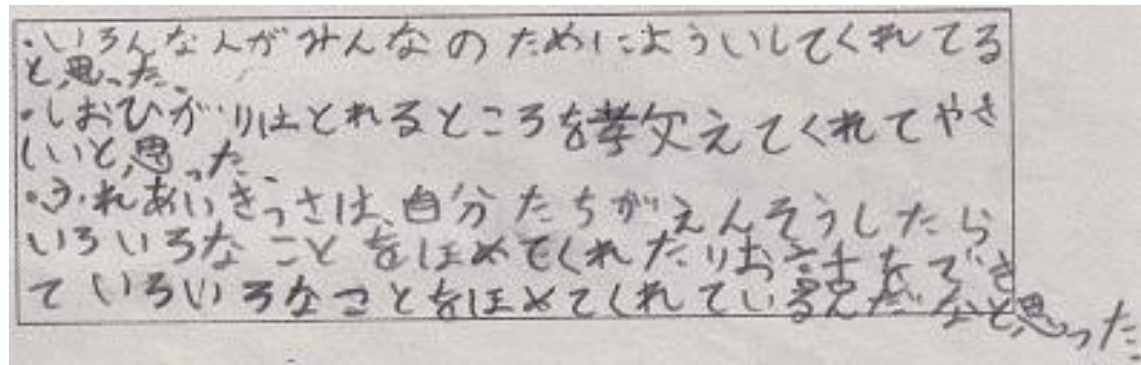
手まり寿司
づくり

「ひと・まち・つながる」学習の
まとめ&発表

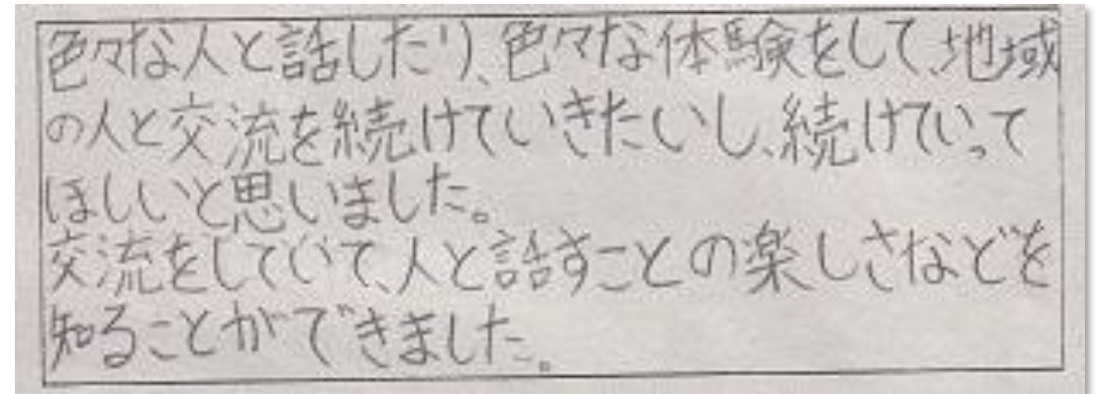
前ページで図示したように、地域の人的・物的資源を生かした系統立てた学習を進めるために、①～③の3つのポイントを常に意識しながら、学校全体の食育に関する取組みのつながりを整理することができた。

この2年間の研究において、カリキュラム・マネジメントを意識した計画の見直しをする際に、教員が学年間の学びのつながりを意識することができるようになった。また、地域の方との連携を進めるにあたって、学校と地域が同じねらいを共有しながら取り組むことができ、従来から取り組んできた様々な取組みの価値を高めることができた。

それは、下記の児童の感想からも、ねらいとしていた①～③の3つのポイントが子どもたちにも浸透したことがうかがえる。地域の特性を生かした交流によって新しい気付きや発見が生まれていることがわかる。



↑「いろいろな人がみんなのためによいしてくれてると思った。しおひがりはとれるところを教えてくれてやさしいと思った。ふれあいきっさは、自分たちがえんそうしたらいろいろなことをほめてくれたり、お話をできていろいろなことをほめてくれるんだなと思った」



自分たちのふだんの生活の中にあり、人口減少・少子高齢社会の影響による自分たちの住む町の社会的な課題を児童と掘り下げること、地域を知り、見つめなおし、社会全体で考えていける取組みとなったのではないかと考えている。

(5) 「ひと・まち・つながる」教育のひろがり

これまで紹介してきた「ひと・まち・つながる」体づくり、健康教育、食育だけでなく、岬町や深日地区の課題にスポットを当てた学習も実践してきた。

町内を走る南海電鉄多奈川線とコミュニティーバスは高齢者の生活に欠かせないものである一方、利用者の減少は著しい状況にある。これらを3・4年生の児童を中心に子どもたちのアイデアで活性化させるプロジェクト学習を南海電鉄、岬町総務部、ふるさと創造部、岬町教育委員会生涯学習課、プロの歌手、関西大学文学部地理学地域環境学の教授、龍谷大学社会学部の教授らなどと協働して実施した。令和元年3月に深日港駅前でイベントを開き、平日の午前中にもかかわらず100人近くの来場者があった。

また、令和元年度には、深日地区のみに伝わる漁師の方言である「逆ことば（さかことば）」をテーマに学習を深めた。深日独自の方言である「逆ことば」は、大きいものを「小さい」、多いものを「少ない」と表現するなど非常にユニークで特徴的である。そのため、関西のメディアでもたびたび取り上げられてきた。しかし、その使い方や用法の真意には、決して相手を傷つせず、仲間意識を高めあうために使うという背景があることは、ほとんど知られていない。こうした豊かな言語文化も継承者が著しく減っている現状にある。「逆ことば」に詳しい地域の方や、富山大学人文学部の教授らの協力を得て、聞き取り学習をし、「逆ことば」の現状について分析し、その成果を劇として地域で発表するなど、学習の成果を社会還元させる取組みにつなげることができた。



深日地区民生委員の方の感想

ふれあい喫茶への参加者の増加が見られ
喫茶に活気があふれるようになった。以前はコーヒーをのんで
早々に帰っていた人達も長時間の滞在がみられ
生徒とのふれあいの大切さを感じます

子供達のふれあい喫茶で歴史や国際交流についての
劇や発表をしているとき、年齢の差を越えて同時体験して
いるような気持ちになる人も聞いています

地域の方からは、「ふれあい喫茶（※）への（ご高齢の方の）増加が見られ、喫茶に活気があふれるようになった。以前はコーヒーをのんで早々に帰られていた人達も長時間の滞在が見られ、生徒とのふれあいを大切に感じます」や、「子供たちがふれあい喫茶で歴史や国際交流についての劇や発表をしているとき、年齢差を越えて同時体験しているような気持ちになる人も聞いています」（右図参照）とあるように、学習の成果が児童だけでなく、地域の高齢者にも還元されていることから、少子高齢化している地域の活性化につながっているといえる。

深日小の場合、効果的な学習を進めるにあたって、重要な役割を果たしたのが岬町の生涯学習課と岬町社会福祉協議会である。両者とも「生涯学習」というテーマを持つことから、学校とご高齢の方を結ぶ橋渡し役となり、町内外の団体やグループとのパイプ役となってくれた。また、生涯学習課の持つイベント運営力、社会福祉協議会の持つ公益性と地域に根差した活動は学校の持つノウハウとは違ったものであったことから、連携を深めたことで両者がWIN-WINの関係を築くことができた。



※「ふれあい喫茶」とは、社会福祉協議会と地区福祉委員会が運営している子どもから大人まで集える居場所（コミュニティカフェ）のことである。月1回実施され、小学生も参加して、年間通じて世代間交流を行っている。

2. 取組みの成果について

(1) 子どもたちの変容について

右表は「地域の人や大学生との交流はあなたにとって良い経験でしたか」という問いを、3年生以上にアンケート調査した結果である。全体の98.1%が肯定的な回答をしている。その上で、カリキュラム・マネジメントの軸である「ひと・まち・つながる教育」を通して、児童の気付きや学びの深まりについて考察したい。

右及び下に示したのは、3年生と6年生の感想である。平成26年度入学の6年生は学校の変革を体験してきた学年である。

3年生と比較すると、他者との交流を通して、相手が喜ぶことが自分の喜びに変わり、自分たちの自己肯定感や新たな気付きへとつながっていることがわかる。

自分が高齢者にな、たとき、交流があると楽しい人生がおくれると思う。ちょっとの交流だけでも楽しいと思、てくれたらう水しい。

<3年生児童の感想>

「くりひろいでは、いのししがくりを食べるとは思わなかったです。ひらめのちぎよほうりゅうは魚のしゅるいはな（ん）百びきもいるとおしえてくれました。」

「くりひろいでは、いのししがくりを食べるとは思わなかったです。ひらめのちぎよほうりゅうは魚のしゅるいはな（ん）百びきもいるとおしえてくれました。」



高齢者になれあえるきっかけがたくさんあるので、地域のことをよく知れる。高齢者と話しているで、心がおろつくことができる。自分が

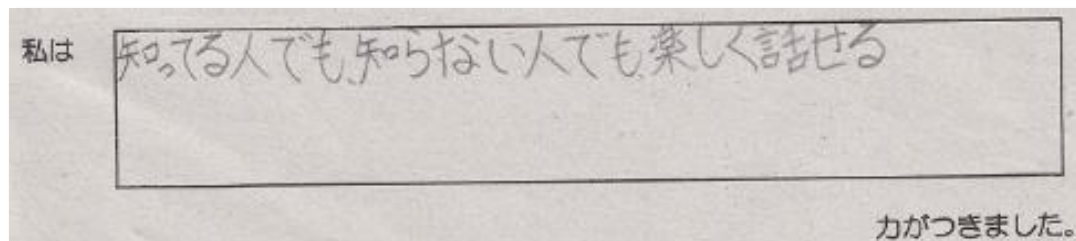
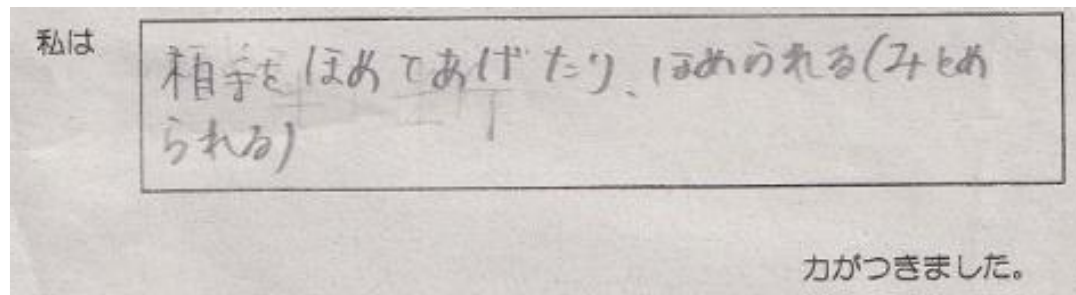
<6年生児童の感想>

地域の人や大学生との交流はあなたにとって良い経験でしたか

学年	そう思う	だいたいそう思う	あまり思わない	思わない
3年	7	4	0	0
4年	15	2	1	0
5年	6	0	0	0
6年	19	0	0	0
計	47	6	1	0
%	87%	11.1%	1.9%	0
	98.1%		1.9%	

児童へのアンケートをもとに岡田作成

「ひと・まち・つながる教育」を通して、自分自身にどのような力がついたのかを子どもたち自身でふり返った結果、人とつながることの楽しさや他者への敬意を自発的にできるようになったことがわかる。地域の人材や資源を有効活用したことで深い学習につながった結果、自尊感情や他者への共感、地域を見つめるまなざしも育成されてきていることがみてとれる。
(右資料参照)



6年生児童の感想

こうした学習への前向きな気持ちは保健室の来室者数の減少に顕著に表れている。右表は年度別の保健室来室者数を示している。平成27年度と比較すると1423人から447人へと約70%も来室者数が減少したことがわかる。

これは、「ひと・まち・つながる」体づくりや健康教育、食育の取組みによって、子どもたちがケガしにくい体をつくることができたり、健康的な生活習慣が身に付いたりした結果であると考えられる。

保健室来室人数

年度	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
平成27年度	101	136	147	82	204	155	124	139	78	144	113	1423
平成28年度	128	152	116	47	121	86	96	92	60	90	73	1061
平成29年度	93	87	87	34	83	62	56	60	60	76	30	728
平成30年度	50	67	60	23	51	59	54	34	46	61	49	554
令和元年度	57	52	46	28	74	45	31	32	36	46		447

※数字は人数

※8月の授業日数が少ないため7月に合算

※令和元年度3月はコロナウイルスによる休校のため集計なし

(2) まとめ

「ひと・まち・つながる」教育によって、児童や教職員は教室を出て、様々な人との交流や経験を通して知識や技能を身につけ、学校での学習活動の充実へと往還させてきた。効果的な学習にするためには、教職員が地域の人的・物的資源をどのように捉え、把握し、つながるのか、そして、様々なつながりをどのように織りなしていくのかが最大のポイントであった。

学校と地域との連携を進めるにあたっては、日頃から、子どもたちのために学習できる環境はないかとアンテナを張って、積極的に外部とのつながりを求めていくことが大切である。時には、厳しいご意見をいただくこともあったが、真摯に受け止め、前向きに進めていくことで、少しずつ学校の取組みを理解してくれる輪が広がっていった。その土壌づくりをあきらめずにできるかどうかポイントとなる。そうした人と人とのつながりの中で、じっくりと時間をかけて信頼関係を築きながら、「子どもたちにこんな力をつけたい！」という思いを共有して、めざす子ども像と一緒に考えて進めていくことで、効果的な連携ができると考えている。

最後に…

※こうした学校と地域の取組みの発信が評価され、令和2年3月からスポーツニッポン（株）との共同企画で、「このゆびと～まれ」と題して、本校の活動内容を定期連載で配信することになった。

学校の取組みと変容について地域の方だけでなく、より多くの方々に知っていただく機会として情報発信に努めている。人口減少・少子高齢社会は深日地区のような比較的都市部に近い地域でも深刻な問題であり、深日小の取組みを全国に向けて発信することで、児童数の減少・人口減少・少子高齢社会といった課題を共有する多くの自治体や小学校の活性化のヒントになってほしいと願っている。

このゆびと～まれ

【第23回】地域のご高齢者の方々とのかわりを通して

[2020年8月3日 05:00]

いいね! 0

シェアする

ツイートする



参加された方の数を見てください。子どもたちが行くことで100人近く集まって下さるようになりました
Photo By スポニチ

深日（ふけ）小では、18年度から「ふれあい喫茶」という集まりに参加してもらっています。岬町社会福祉協議会が中心になり、地区の会館にご高齢の方たちが、ほぼ月1回のペースで集まり交流するイベントです。

各学年が順番に伺わせていただき学習した内容の発表や、聞き取り調査などを行っています。

歌や音読、劇や出しものだけでなく、自分の得意なものなどを披露してもかまいません。「見てもらう」という機会が少ない児童たちにとって